The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	アスペクト研究覚え書き
Author(s)	井元, 秀剛
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2018, 2017, p. 1-10
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/69943
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

アスペクト研究覚え書き
井元秀剛

1. はじめに

本稿はアスペクトの概念を改めて明確に規定し、今後のアスペクト研究がどのような方向を目指すべきか、ということに対する筆者の立場を述べるものである。アスペクトはテンス概念と密接に結びつき、常に並列的に論じられながら、必らずしもその定義が定まっておらず、テンスとの違いも明確であるとは言いがたい。特に英語の have + pp もしくは be + 現在分詞のような文法形式の働きを論じる文法的アスペクトの問題と、Vendler (1967)が問題にしたような個々の動詞の意味にまつわる語彙的アスペクトの問題が峻別されないまま議論されることがあり、問題を複雑にしている。テンスとアスペクトを対比的に定義したものとして工藤（1995）の以下の記述をまずあげておく。

(1) テンスは、基本的に、過去、現在、未来のような<発話時を基準軸とする、出来事の外的な時間的位置の相違>を表し分ける文法範疇である。アスペクトは、時間のなかで展開する出来事を、(ロシア語の完成体のように)一括化して完成的に捉えるか、(ロシア語の不完成体や英語の進行形のように)不完成的に捉えるかの、<出来事の内的時間に対する視点の相違>を表し分ける文法範疇である。

（工藤 1995:3）

テンスは外的時間、アスペクトは内的時間と表現されているが、内的外的という区別だけではそもそもそれがどのように違うのか必ずしも明確ではない。しかし、テンスとアスペクトがともに時間に関係している概念でありながら峻別すべきものであるという考え方がうかがえる。

日本語のアスペクト研究において金田一（1950)の果たした役割は大きい。Vendler (1967)よりも早く、動詞をテイル形の意味に基づいて状態動詞、継続動詞、瞬間動詞、第４の動詞というように分類し、これが日本語における語彙的アスペクト研究の嚆矢になった。さらに金田一（1955)ではテンスとアスペクトをどのようにとらえるべきかという問題を正面から扱っている。アスペクトもしくはテンスに分類される最小の意味単位を「〇〇態」と表現し、そのような意味の外延から帰納的にテンスアスペクト概念を規定しようとしたもので、結論として以下のような既定を導いている。

(2) a. テンスとは、ある動詞その他用言の意味する状態・動作・作用が、ある標準から眺めた場合、時間的にそれより以前であるか、同時であるか、以後であるかを示す形態のちがいである。そしてテンスの一つ一つの態は、他の動詞でおおうことができないような意味を有する。

b. アスペクトとは、動詞その他用言の意味する動作・作用の進行の相を示す形態のちがいである。そして、アスペクトの一つ一つの態は、他の動詞で置き換えることができるような意味を有する。（金田一 1976 :60）

(2a)は明快だが、(2b)は曖昧である。アスペクトは「相を示す形」と表現されているが、「相」という語自体、現在アスペクトの定訳として用いられているものであり、ほとんど同語反復に近い。ただ、金田一は個々のアスペクトの事例をあげているので、何をアスペクトと考えていたのかという外延を把握することはできる。まず、動詞の意味を大きく「ある」の形に還元できる状態を表すもの(状態相)と、「いる」の形に還元できる動作を表すもの(動作相)に二分し、そのそれぞれにテンスとアスペクトに分類される意味単位(態)を付与していく。テンスに関する限りマーカーとしてはタ形しかないのだが、

(3) a. 昨日は月曜だった。 (過去態)

b. 月が出た。 (完了態)

(3a)のように状態相の場合は「過去態」(3b)のように動作相の場合は「完了態」と区別している。この場合相と動詞の種類は対応し、状態相となるのは状態動詞、動作相となるのは瞬間動詞である。一方、アスペクトに関してはマーカーの種類も多く、たくさんの態があり、相と動詞の種類も一位対応ではない。状態相については

(4) a. 雪が積もっている。 (既然態)

b. 彼は本を読んでいる。(進行態)

c. この頃は栄養失調で人がどんどん死んでいる。(反復進行態)

d. 時計が三時を打とうとしている。(将然態)

e. この道は曲がっている。(単純状態態)

のように、すべてがテイル形であるが、動詞の種類は瞬間動詞(4a,c,d)、継続動詞(4b)、状態動詞(4e)と様々である[1]。

動作相については態の種類も動詞の種類も様々である。

(5) a. 本を読んでしまう。 (終結態)

b. 明かりが消えてしまう。(既現態)

c. 本を読みかける。 (始動態)

d. 死にかける。 (将現態)

e. 電気が消える。 (単純動作態)

f. 本を読み続ける。 (継続態)

g. これからたくさんの本を読んでいく。 (反復進行態)

これらの例文と名称から実態を正確に把握するのは難しい。「～てしまう」が表す終結態と既現態の違いは、終結態は継続動詞につき完全にその動作を終えるという様態を表すのに対し、既現態は瞬間動詞につき、本当にその動作が行われるという意味を表し、同時に残念だというようなニュアンスを伴うという。ただ、同じ含意は終結態にも伴うことがあり、また終結態であっても本当にその動作が行わせるという意味あいを持っているとも考えられるため、この区別が必ずしも意味のあるものかどうかは分からない。同様なことは始動態と

[1] (4e)の「曲がる」などは常にテイルをともなって用いられる第 4 類の動詞と分類されるべきものだが、ここでは「曲がっている」全体で状態動詞とみなしている。

将現態の違いについてもいえる。始動態は継続動詞につき、動作を始めた状態を表すのに対し、将現態はこれからその状態になろうとしている段階を表す。確かに「読みかけの本」といえば、まだ読み終わっていないがすでに読み始めた本のことだが、「本を読みかけてやめた」だと、まったく目を通していないこともある。この場合は「読む」自体が瞬間動詞として用いられており、将現態になるという。金田一の動詞分類は個々の動詞ごとに定まっているものではなく、同じ動詞でも継続動詞になったり瞬間動詞になったりする。ということは継続動詞につく場合が始動態で、瞬間動詞につく場合は将現態であるという主張の反証可能性は担保されなくなる。実際「読みかける」という動詞のアスペクトとしてすでに少しは読んでいるのか全く読んでいないのかを区別する意味があるのか、という問題もある。また(5e)で例示される継続態も動詞「読む」のアスペクトというより、「続ける」という動詞の語義の問題ではないかという印象もうける。実際このアスペクトの名称や分類がその後の研究者に受け継がれることはなかった。ただ、(4)も(5)もすべてタ形にもおくことができ、ル形/タ形の対立とは独立して存在している。(2b)の「アスペクトの一つ一つの態は、他の動詞で置き換えることができる」という記述から、アスペクトが動詞そのものの意味のあり方に関わるカテゴリーであると考えていることがうかがえる。確かに「読んでしまう」や「読みかける」は「読む」とは別の動詞であると考えることもできるだろう。しかし、そこで表される複合動詞の意味は「読む」という元の動詞が表す時間的変化の状態を表しているといえる。アスペクトとはそのような意味の一般化にほかならない。

アスペクトがあらゆる動詞に適用される文法範疇であり、動詞そのものの語義に影響を与えるものであるならば、その定義にあたって、そもそも動詞は何を表し、動詞の意味の類型をどうとらえるのかという問題を避けて通ることはできない。そこで次に動詞の意味の類型について考えてみたい。

2. 動詞事態のアスペクト

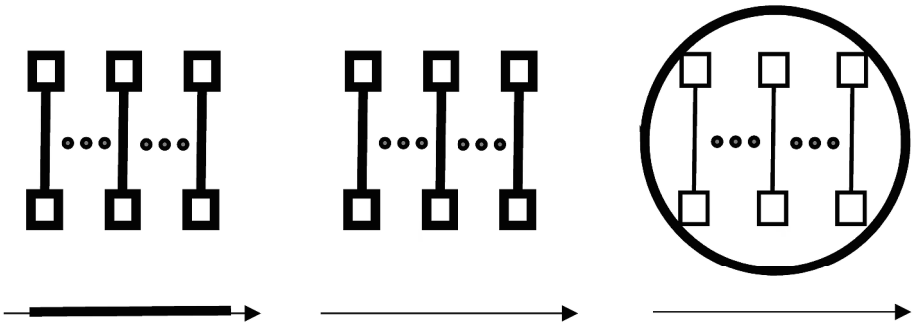
2.1. 動詞のあらわすもの

まず、ここではテンス・アスペクトの適用範囲を動詞に限定する。日本語では形容詞や形容動詞もタ形の語尾をとって過去の状態を表すことができるが、その場合も「赤かった」のように補助動詞「ある」を介してであるので、あくまで動詞に還元することは可能である。動詞自体が表している内容は

(6)　時間をともなった状態のありよう

という形で規定できる。これは Langacker (1987)の process に対応するもので、名詞に対応する thing や形容詞・副詞・前置詞に対応する atemporal relation と対比するとわかりやすい。以下の図は Langacker がこれらの違いを明示するために用いた図である。

(7) (a) (b) (c)

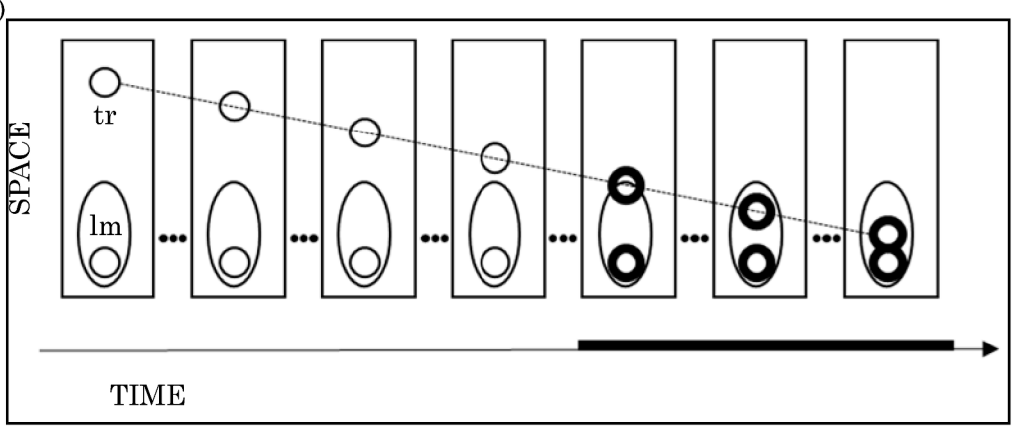


PROCESS ATEMPORAL RELATION THING

(Langacker 1987:247)

認知文法では全体と部分というゲシュタルト的な考え方をとっており、ベースと呼ばれる全体の知識が背後にあって、その一部であるプロファイルという部分が活性化され、言語が指示する実体になると考えられている。(7)図の太線で示されている部分がそのプロファイルであり、atemporal relation に加えて時間軸もプロファイルされているところにその特徴がある。「時間を伴った状態のありよう」とはまさにこの(7a)で示されるようなものなのである。さらに個々の動詞について細かく見てみると、英語の動詞 arrive は以下のように示されている。

(8)



ARRIVE

(Langacker 1987:247)

これを Paul arrives at the station という事態に対応するものとみると、ベースにある事態は主語として現れるトラジェクターの Paul が時間の経過とともにランドマークの駅に近づき、最後はそこに至るというプロセスであるが、プロファイルされるのはこの最後の部分であり、とらえ方によっては最後の瞬間だけと考えることができる。

このような動詞概念の理解を前提とすれば、アスペクトは

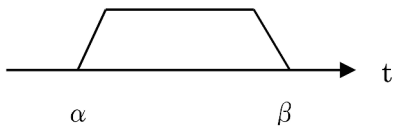
(9)　動詞が表す事態のどの時間軸上に対応する状態をプロファイルするかの指標

として定義できる。この定義によって、個々の動詞事態がアスペクトを持っていることも、さらに文法的アスペクト標識によって、プロファイルされる位置が変わることも、同じアスペクトの概念として規定することが可能になる。英語の arrive や日本語の「到着する」は語義として接近の最終段階をプロファイルするというアスペクトをもっており、これに have arrived や「到着している」のようなアスペクト指標が加わると、到着した後の状態がプロファイルされるようになるのである。

2.2. 動詞の類型

ではアスペクトを考慮するために、個々の動詞をどのように類型化したらよいのであろうか。動詞の類型化を試みた金田一 (1955), Vendler (1967), Pustejovsky (1991)を比較してみると、極めて似ている。そもそもすべての動詞が表しているのは時間を伴った状態のありようなのだから、横軸を時間軸、縦軸を状態とすると、より抽象的な形として

(10)

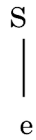


のように図示することができる。α は事態の開始点、β は事態の終了点である。アスペクトとして問題となるのは、α と β によって区切られる時間のどの部分をプロファイルするかということなので、α と β がどのように現れるかということで動詞を分類する以外にはない。そこで結果として同じような分類になっていると思われるが、筆者は Pustejovsky の 3 つの分類が原理的に最も妥当であると考えているので、その名称を踏襲することにする。ただし、定義や属性の理解は筆者独自のものである。

2.2.1. State (状態動詞)

(10)における α も β もプロファイルしないタイプの動詞で、恒常的な状態を時間とともに述べるものである。金田一 (1955)の「状態動詞」、Vendler (1967)の State にあたる。英語の be 動詞や日本語の「ある」がその典型である。ベースのレベルで α も β も存在しないものは形容詞に近いが、あくまでも時間をプロファイルする点で形容詞と異なり、形容詞述語も時間属性を帯びて過去の状態として表現するためにはこの状態動詞「ある」に支えられなければならない。英語では進行形にならいこと、日本語では「～ている」形にならないことが特徴としてあげられるが、進行形やテイル形は均質な状態部分をプロファイルするアスペクト操作なので、もともとその性質を有している状態動詞の場合、そのオペレーションは不要なのである。Pustejovsky は恒常的状態を単一のイベントととらえて以下のように表記している。

(11)　State (S)：a single event, which is evaluated relative to no other event
Examples: *be sick, love, know*
Structural representation



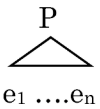
Pustejovsky (1991 :56)

英語では see や know のようにベースのプロセスとしてはαやβが存在していたとしてもプロファイルされずにこのカテゴリーに入る動詞が少なくないが、日本語の「見る」や「知る」はαもプロファイルされており、純粋に状態動詞としてしか用いられない動詞は「ある」のような一部の動詞に限られる。

2.2.2. Process (全体動詞)

State とは逆に(10)におけるすべての段階をプロファイルしている動詞である。金田一の「継続動詞」Vendler の Activity にあたる。run や「走る」のように継続可能の行為を表すのが典型であり、進行形やテイル形にしたときに継続中の状態を表すことで他のカテゴリーと区別できる。この動詞の特徴は α から β にいたるまでの継続相に置かれた場合にプロファイルされる状態が時間的な幅を持っていることであり、金田一はこの特徴をとらえて「継続動詞」と呼んでいるし、Vendler も[+継続性]をこのカテゴリーの特徴にあげている。その点では State と同様なのだが、動作と状態という区別が一般的である。動きがあるかないか[±動作性]という素性で違いを特徴づけるわけだが、Pustejovsky は同じイベントの連続ととらえて以下のように記述する。

(12)　Process (P): a sequence of events identifying the same semantic expression
Examples: *run, push, drag*
Structural representation:



Pustejovsky (1991 :56)

run なら一つの走る動作がイベントであり、それが連続して続く、というイメージである。ただ、筆者はアスペクトという観点から見る限り、動作と状態を区別する必要はなく、動作が進行中の事態は同一状態の継続とみなすことができ、その状態の中身はアスペクトとは無縁であると考える。筆者にとって State と Activity の違いは状態変化の部分、すなわちαやβ部分を持つかいなかである。hear は英語では State であり、聞こえている状態を表すが、日本語の「聞こえる」はαをプロファイルしている。そのため「聞こえている」は聞こえている状態が継続中ということであり、継続動詞、すなわち Activity であろう。しかしながら動作とは言いがたい。Process の場合、原理的にはβもプロファイルしていると思われるが、活動段階に入るαの方が認知的に突出しておりβは背景化されることも多い。し

ばしば非限界性という特徴を Activity に与えることもある。「走る」という行為はどこまでも続けることができる、というのがその説明だが、このとらえ方はβ部分がプロファイルされていないという把握である。だが、「走り始め」や「走り終り」、「読み始め」や「読み終わり」を想定することは可能であり、β以降の状態をテイル形が示すことも珍しくはない。

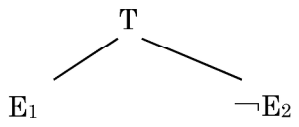
(13) あの人の本の読み方の早いのには驚いた。今読み始めたと思ったらもう読んでいる。 (金田一 1976:11)

金田一 (1950)はこれを、「読む」が瞬間動詞として使われた例としてあげているが、継続動詞としての「読む」と意味的な違いを認める必要はない。あくまでも「読む」は Activity であり、(13)にいおいて、αよりβのプロファイルが前面にでてくるプロセスは別に考えるべきである、というのが筆者の立場である。「読む」のβは、語彙レベルではプロファイルされているのだが、背景化されることもある、ということなのである。日本語でこの特徴を表すとすれば、αからβに至る推移を経てβにいたるそのすべてがプロファイルされている動詞ということで「全体動詞」と呼んでみたい。

2.2.3. Transition (変化動詞)

αもしくはβにおける変化のみをプロファイルする動詞である。金田一における「瞬間動詞」、Vendler における achevement にあたる。Pustejovsky の記述は以下の通りである。

(14) Transition (T): an event identifying a semantic expression, which is evaluated relative to its opposition. (…)
Examples: *give, open, build, destroy*
Structural representation (where *E* is variable for any event type)



Pustejovsky (1991:56)

E の状態から E でない状態に変化するということである。金田一 (1955)がこのタイプを「瞬間動詞」と命名したのは継続動詞と対比する意図があったと思われるが、奥田 (1978)が批判したように、このカテゴリーに属する動詞の中には瞬間という性質をもたないものも多い。「太る」「やせる」「帰る」などがそうである。これらの動詞はいずれも変化を問題にしているという奥田の指摘は正しく、日本語で表現するなら「変化動詞」という名称がふさわしいと思われる。ただ、Process にもαやβ、すなわち変化が存在することには注意しておかなくてはならない。そのため Process が Transition と解釈されることは頻繁に生じる。筆者は build や destroy は Transition ではなく、Process に分類するが、Pustejovsky がこれらの動詞を Transition に分類するのは、βが語彙的にプロファイルされる動詞だからである。build も建てている対象ができあがらなければ build したことにはならないし、destroy も対象が破壊されなければ destroy したことにならない。典型的な Process と異なりβが前面にでてプロファイルされると、αやαからβに至るプロセスは背景化され、

Transition と解釈されるのである。βのみならず、αからβまでのプロセスまでプロファイルされるという解釈であれば、Vendler の分類では Accomplishment になる。事実 build は典型的な Accomplishment であるとされている。

2.2.4. それ以外のカテゴリーに対する考察

金田一は上記のカテゴリー以外に常にテイル形をつけて用いられる第 4 の動詞という分類をたてている。「聳える」などであるが、「道が曲がっている」の「曲がっている」などももともとまっすぐなのを曲げたわけではないからこのカテゴリーに入れている。しかし「太っている」などは、元から太っている人と太った結果として太っている人とを言語的に区別する必要はない。現在の状態をそのように形容しているだけであって、それがどのようなプロセスの結果であるか、などは言語外の問題である。これは fictive motion としてとらえるべき現象で、「道が曲がっている」というのも現実にはない架空の曲がるという動きの結果状態のようなとらえ方をしていると解釈すべきものである。とすれば、「聳える」なども下から遙か上に向かって上がっていく動きを仮想的にとらえたものであると解釈することができる。こう考えることで、「聳える」も「曲がる」も Transition であると了解することが可能である。

Vendler の Accomplishment もこの分類ではすべて Process である。Activity と Accomplishment の違いはβのプロファイルの有無であるが、前にも述べたように、筆者は Process の場合もβは原理上プロファイルされているが、文脈によって背景化されるという立場なので、Accomploshment を立てる必要がないのである。βの有無のテストとしては Imperfective Paradox がよく知られている。

(15) a. John was pushing a cart.
　　 b. John pushed a cart. (Dowty 1979:133)

(16) a. John was drawing a circle.
　　 b. John drew a circle. (Dowty 1979:133)

Activity である push a cart の場合、(15a)は(15b)を含意するが、Accomplishment である draw a circle の場合、(16a)は(16b)を含意しないという。確かにそうではあるが、動詞 draw 自体は Activity であり、was drawing だけならば drew を含意する。そして was drawing が示している内容は was drawing a circle の場合も変わらない。あくまでもαからβに至る状態を表しているのである。このことから draw と draw a circle の間に語彙アスペクトの違いを見いだす必要はなく、あくまで Process に属する動詞として draw をとらえ、完成品を目的語と取る場合にβがプロファイルされるという一般的な現象の結果として draw a circle を分析すべきなのである。

3. アスペクト研究のめざすもの

現実に発話された動詞のアスペクト価値は個々の動詞がもつ固有のアスペクト価値と文脈の働きとの総合である。この二つは明確に区別されなくてはならない。語彙的アスペクト

は動詞がその語義として本質的に担っているアスペクトであり、筆者は Pustejovsky (1991) にならって、すべての動詞のアスペクトタイプを State (状態動詞)、Process (全体動詞)、Transition (変化動詞)の 3 つに分類する。各々の動詞はこのどれかに属するが、これは語義に内在するアスペクトである以上、多義を認めない限り 1 つの動詞が複数のタイプにまたがって存在することはない。Process に属する動詞が、発話内で Transition の性質をになうことがあるとすれば、それは Process を Transition に変質させるような文脈の働きがあったからであり、その働きの多くは文法的一般化が可能な現象なものである。この一般化を怠り、発話上のアスペクトを個々の語彙レベルの特性に押し込んでしまっては現象の本質を見失うことになると思う。

例えば、文法的アスペクト操作の典型の一つに状態化というのがある。日本語のテイル形、英語の進行形や完了形、あるいは現在時制やフランス語における半過去などにこの作用がある。αやβの以前や以降の状態をスペース全体に広がるように解釈させる操作で、日本語のテイル形は、αもしくはβという状態変化以降の状態をプロファイルする操作としてある。(4)のすべてが状態相に分類されているのは、テイル形が状態相を表しているからである。この操作は動詞のタイプごとにプロファイルされる状態が異なる。「走っている」「本を読んでいる」「CD を聴いている」などのように Process の場合、しばしばβが背景化されαがプロファイルされるため、α以降の状態、すなわち動作の進行状態を表すことが多い。これに対し、「到着している」「落ちている」「結婚している」「死んでいる」などはβがプロファイルされる Transition であるため、それ以降の結果状態を表すことになる。しかしながら Process は基本的にβを内在しているので、そのテイル形が結果状態を表す可能性は常に持っているのである。(13)のような特殊な例を持ち出さなくても、過去に起こった事態を確認するテイル形の記録と呼ばれる以下の用法はあらゆる Process の動詞が持っている。

(17)　警部、犯行のあった日の前日、ホシはこの店で味噌ラーメンを<u>食べています</u>。

これを「食べる」が瞬間動詞として用いられた例である、というように個々の動詞の性質に還元してしまうと、すべての継続動詞が瞬間動詞としても用いられるということになる。そのような分析よりも、あくまで「食べる」は Process であるが、記録の用法としてテイルが適用された場合、βがプロファイルされることになるという一般的な現象の現れとして(17)を分析すべきなのである。

Transition の動詞であってもαからβに至るプロセスをプロファイルすることになる言語操作も存在する。複数生起の連続であり、

(18) a.　戦争でたくさんの人が次々と死んでいる。

b.　大会を前に選手が次々と選手村に到着している。

などは個々の動作は Transition であっても複数自体の生起を 1 つの Process とするとらえ方を生みα以降の事態の継続という解釈になる。

日本語のテイル形がαもしくはβ以降の状態を表すのに対し、英語の進行形はβ以前の状態を表す。そのため Process の場合はα以降β以前の状態を表すことになり、日本語のテ

イル形と同じ内容になるが、Transition の場合、進行形はβ以前、テイル形はβ以降と全く異なった内容を表現する。He is arriving at the station.は「彼は駅に到着しつつある」であって「彼は駅に到着している」とは逆である。

多くの言語の現在形やフランス語の半過去形はあらゆる動詞を状態化する。

(19)　彼はテニスをする

は、現在スペースにおける状態を表すので、文脈によってテニスをするという習慣があるという状態であったり、これからテニスをするつもりという意志を保持している状態であったり、という何らかの形での状態解釈を要求するものであり、この場合のアスペクトをどうとらえるか、という問題は語彙アスペクトの問題ではなく、時制の問題である。

このように個々の動詞の語彙アスペクトを明確に規定した上で、その語彙アスペクトに対してどのような変質が文脈によって加えられるのか、その文脈による変質を文法的アスペクトとして明らかにすることが、アスペクト研究のめざす方向である。

参考文献

Dowty, D. (1979), *Word Meaning and Montague Grammar*, Reidel.

金田一春彦（1950)「国語動詞の一分類」『言語研究』15, 5-26. (金田一(編)(1976)に所収)

金田一春彦（1955)「日本語動詞のテンスとアスペクト」『名古屋大学文学部研究論集』(金田一(編)(1976)に所収).

金田一春彦（1976)『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房, 27-61.

工藤真由美（1995)『アスペクト・テンス体系とテクストー現代日本語の時間の表現ー』ひつじ書房.

Langacker, R. (1987), *Foundations of Cognitive Grammar VolumeI Theoretical prerequisites*, Stanford University Press.

奥田靖雄（1978)「アスペクトの研究をめぐって」『ことばの研究・序説』むぎ書房, 105-143.

Pustejovsky, J. (1991), "The syntax of event structure", *Cognition* 41, 47-81.

Vendler, Z. (1967), "Verbs and Time", *Linguistics in philosophy*, Cornell University Press, 97-121.

尚本研究は JSPS 科研費 26370448 の助成を受けて行われたものである。